

招待講演

講演者のプロフィール

中村 桃子 (なかむら ももこ)

【略歴】

上智大学大学院博士課程前期修了。博士（人文科学）。専門は言語学。関東学院大学経済学部講師，助教授，教授を経て，2017年から関東学院大学経営学部教授（現職）。この間、ブリティッシュコロンビア大学、ハワイ大学マノア校客員研究員。

受賞 2008 『「女ことば」はつくられる』 ひつじ書房(第27回山川菊栄賞)
学会活動 2006- Editorial Board, *Gender and Language* (Journal of International Gender and Language Association)
2012-2014 Board member, 日本女性学会

【主要業績】

『新敬語「マジヤバイっす」——社会言語学の視点から』（白澤社, 2020）
『翻訳がつくる日本語——ヒロインは「女ことば」を話し続ける』（白澤社, 2013）
『女ことばと日本語』（岩波新書, 2012）
『ジェンダーで学ぶ言語学』編著（世界思想社, 2010）
『〈性〉と日本語——ことばがつくる女と男』（日本放送出版協会, 2007）
『「女ことば」はつくられる』（ひつじ書房, 2007）
『ことばとジェンダー』（勁草書房, 2001）
『ことばとフェミニズム』（勁草書房, 1995）
『婚姻改姓・夫婦同姓のおとし穴』（勁草書房, 1992）他
Challenging Leadership Stereotypes Through Discourse: Power, Management and Gender.
共著 (Springer, 2017)
The Handbook of Language, Gender, and Sexuality. 共著 (Blackwell, 2014)
Gender, Language and Ideology: A Genealogy of Japanese Women's Language. (John Benjamins, 2014)
The Political Economy of Affect and Emotion in East Asia. 共著(Routledge, 2014)
The Language and Sexuality Reader. 共著(Routledge, 2006) 他

新敬語「マジヤバイっす」

—日常会話からメディアへ—

中村 桃子（関東学院大学）

近年、「スタイル」が注目されている。「スタイル」とは、集団のアイデンティティと結びついた話し方や服装などを指す。スタイルによる区別は、集団を差別したり、集団をステレオタイプ化するのに利用される。そこで、スタイルがどのようにつくられるのか、スタイルにはどのように意味が与えられるのかが研究されている。

その中でスタイルの形成に大きな役割を果たしていると考えられているのが、メタ語用論的言説、特にメディアの言説である。従来の研究では、メタ語用論的言説がスタイルを形成する過程が明らかにされてきた。一方で、メタ語用論的言説がスタイルの形成を阻止する過程は明らかにされていない。

そこで今日は、「マジヤバイっす」に代表される「ス体」とでも呼べるスタイルを題材に、男子大学生の日常会話で使われている「ス体」が、『発言小町』というメディアのメタ語用論的言説によってどのように意味付けされるのか、その結果、「ス体」はどのようなスタイルとして認識されるようになるのかを見る。

データは、同じ大学の運動部に属するふたりの1年生男子とひとりの2年生の30分の会話をビデオ撮影した日常会話と、『発言小町』に投稿された「ス体」に関するトピとそれに対する344のレスである。

分析の結果明らかになったのは、男子大学生は「ス体」を部活の先輩に対する〈親しい丁寧さ〉を示すために使うことが多く、それ以外にもさまざまなスタンスを表現するのに用いている。一方、『発言小町』のレスは、「ス体」を使わないレスと「ス体」を使ったレスの主に2つの手法によって、「ス体」の〈丁寧さ〉を否定している。「ス体」を使わないレスは、「ス体」を「正しい日本語」から排除し、「ス体」の話し手を特定の集団に限定することで、「ス体」の意味の可能性を狭めている。「ス体」を使ったレスは、面白おかしいパフォーマンスとして「ス体」を用いることで、〈面白さ〉という意味を前景化し、その結果、〈丁寧さ〉を薄めている。

この分析結果は、『発言小町』のメタ語用論的言説が、「ス体」の〈丁寧さ〉を否定することで、「ス体」が丁寧なスタイルとして成立することを阻止し、日本語の敬語イデオロギーを維持管理する役割も果たしていることを示している。